

雨中人物画に対する音楽の効果について

A43092 松崎まい子

[目的]

絵を描く際に、音楽がある場合とない場合では、絵の変化や被験者の気分に変化が現れるのかどうかを、本研究の目的とする。

音楽がないときに比べ音楽があるときの方が、リラックスし、絵の色使いなどが淡く、パステルカラーの使用が多くなる。また、原色を使用しても明るい色を中心とした絵となる。音楽がないときは、静かな状況がストレスとなり、全体的に暗く重いイラストになると考える。実験後につらさの評定を聞き、音楽がある場合では実験後のつらさの評定が低くなっていると仮定した。

[実験]

対象者は19歳から22歳の学生と社会人。男性2名、女性6名の計8名である。実験は、それぞれ2回行う。2回とも音楽がある群、2回とも音楽がない群、1回目音楽ありで2回目は音楽なしの群、1回目音楽なしで2回目音楽なしの群の計4群で行った。

使用した曲は、モーツァルト (Mozart) のディヴェルティメント第17番二長調 K. 334 第4楽章 Adagio。他に、B4サイズの画用紙、18色の色鉛筆を準備した。

①落ち着いた状況を作るために、数独(9×9)を5分間行った。②絵の取り扱い方を説明した。音楽ありの場合、このときから曲をかけ始める。③「雨の中の人物、または自分を描いてください。」と教示。④質問紙の記入。

質問紙の内容は、絵に関する質問や今のつらさの数値について答えてもらった。2回目の場合は、前回の絵と見比べる項目を作る。また、条件が違う場合は条件の違いについて、思ったことを記述してもらった。質問紙に関しては、すべて被験者の言葉で書いてもらった。

[結果]

違う条件で実験を行った結果、つらさの数値や色の使用、絵の印象が変化していた。色の使用や印象は、音楽があるほうがパステルカラーの使用が多く、淡く柔らかい印象の絵になっている。つらさの評定に関しては、音楽があるときに比べ、音楽がないときのほうが高くなっている。音楽の有無によって、リラックスしたと考えられる。

同じ条件で行った結果、2回ともほぼ変わらない結果が出ている。1群と4群の絵を比べると、音楽がある1群のほうが、パステルカラーの使用も多く、絵の印象は柔らかく感じられる。また、つらさの評定も1群に比べ、4群のほうが高くなっている。4群のほうが、2回とも緊張していた。逆に、1群は2回ともリラックスしていたと言える。

以上のことから、音楽がリラックス効果を与えていることがわかった。

[考察]

音楽がない場合に比べ音楽があるほうが、被験者の絵の印象が柔らかくなり、パステルカラーの使用頻度が高く、つらさの数値も低くなっていた。また、2回とも音楽ありとなしを比較して見ると、音楽ありのほうが、柔らかく、パステルカラーの使用度が高い。つらさの評定の平均を比べても、音楽なしのほうが高くなっていた。被験者の内観を調べると、音楽がない状況では緊張し、音楽がある状況では描きやすいと述べていた。

以上のことから、音楽があるほうがリラックスし、絵や被験者に影響すると実証できた。